

第3号  
平成21年5月



放送大学千葉学習センター

THE OPEN UNIVERSITY OF JAPAN CHIBA STUDY CENTER



写真：山本直美

The more I learn, the more I realize I don't know.  
The more I realize I don't know, the more I want to learn.

*Albert Einstein: 1879-1955*

### 平成22年度開設の「面接授業」科目について【お願い】

ただいま来年度「面接授業」の編成作業を行っております。新たに開講が望ましいとお考えの「面接授業」科目・内容を、どうぞお聞かせください。学生諸氏のご要望を可能な限り反映した編成を行っていきたく考えております。

お書きいただく用紙はセンター1階のフロア等に用意してあります。締め切りは、5月末日です。

### 千葉学習センター2階「学習・集い室」の展示について【お願い】

これまで2階にあった図書室が放送大学図書館に併合されたことに伴い、テーブル・椅子などを新調して、学生諸氏の自習や集いの場としてお使いいただけるようにしました。

また、その壁面に、学生諸氏のサークル活動の成果を展示していただいております。

さまざまなサークルにご活用いただくべく、サークル活動代表者にお集まりいただき、「学習・集い室」壁面の今後の活用方法を巡ってご意見をうかがいたしたいと思います。

各サークルにおかれましては、日ごろのサークル活動を通してお考えになられていることなどを含め、ご意見をまとめておいてくださるよう、お願いいたします。

### 「目安箱」について【お願い】

所長室前の廊下に、「目安箱」を新設しました。改善すべきとお気づきのこと、カリキュラム等に関するご質問など、皆様の忌憚のないご意見をお寄せください。この「目安箱」は、皆様のご意見をうかがい、より充実した学びの場としての千葉学習センターづくりを進めていくためのものです。

なお、「目安箱」の鍵は所長が所管し、各位のプライバシーは厳守いたします。

### 客員教員について【ご報告】

本年4月より各センターに客員教員をお迎えする制度ができました。千葉学習センターでは、すでに5名の先生方を客員教員としてお迎えしております。

客員教員からは、皆さまの学習相談や当センターの運営等にご支援をいただけることになっていきます。本誌4～7ページには、すでにご着任いただいている客員教員からのメッセージを掲載いたしました。

なお、6月1日より、国際法がご専門の小森光夫（千葉大学名誉教授、元北海道大学大学院法学研究科教授）先生に客員教授としてご就任いただきます。



客員教授 小森光夫先生

### 授業等の成果品掲出によるキャンパスギャラリー化について【ご報告】

お気づきの方も多いかと思いますが、1階・2階の壁面を飾っているのは、本年度前期面接授業「デザインの基礎」を受講された方々の作品です。いずれも力作ばかりです。千葉学習センターの空間を皆さまのさまざまな作品等で埋め尽くし、キャンパス・ギャラリー化を進めてまいります。

なお、2階の「学習・集い室」の壁面の一角を飾っている大型作品は、大川良子氏（人間の探求専攻）が寄せてくださったものです。

どうぞ、皆さまも作品をお寄せください。適度に入れ替えを行い、常にアメニティーに富んだ千葉学習センターにしていきたいと考えております。

放送大学特任教授  
千葉学習センター所長 宮崎 清

## 平成21年度「入学者の集い」が行われました。

4月5日(日)13:30より、千葉学習センター大講義室にて、「入学者の集い」が行われました。

学歌演奏に続いて、本年度より客員教員として本センターの運営や学生相談などにご尽力いただけることになった5名の先生方ならびに教職員の紹介がなされました。次いで、教職員を代表し、宮崎所長より、本誌『ちばがく』の表紙に掲げられているアインシュタインの名言「学べば学ぶほど私たちは無知である自分を発見し、無知であることを自覚すればするほどますます学びたくなる」が紹介され、本センター教職員一同もその名言をかみしめつつ、新入生・在學生と協働して、本センターを生涯忘れることのない「学びの場」「集いの場」にしていきたいとの挨拶がなされました。

続いて、同窓会長・小野鐵男氏より、新たな同志を迎えての祝辞が述べられました。

引き続き、放送大学専任教員・奈良准教授より、カリキュラムの構成、修学上留意すべき事項などにつき、丁寧な説明がありました。

最後に、本郷教務係長から学習センター利用上の諸注意について説明がなされました。

ほぼ1時間30分ほどの入学式ならびにオリエンテーションでしたが、出席された新入生160名(学部生144名、大学院生16名)は、真剣に聞き入っていました。

なお、千葉学習センター平成21年4月入学者数は、1,728名(5月15日現在)です。その内訳は次のとおりです。

学部生	1,495名(全科生350名・選科生693名・科目履修生402名、特別聴講生50名)
大学院生	233名(選科生179名・科目54名)



入学者の集い：  
所長挨拶



サークル紹介：  
入学式終了後に学  
習相談とともに各  
種サークル紹介が  
行われました

客員教授 宮野モモ子（平成21年4月1日着任） 千葉大学教育学部教授  
専攻：音楽学 担当面接授業：音楽の楽しさ



### 音楽の楽しみと生涯学習

皆様こんにちは。今年度は12月に音楽を通して皆様と共に、いろいろな音楽を視聴しながら、皆様の音楽をつくる活動のお手伝いをさせていただくことになりました。

皆様は日ごろ音楽とどのように接していられるのでしょうか？

私は幼稚園生のころから音楽とのかかわりを自然な生活の一部として意識し始め、それ以来さまざまな側面からかかわりを継続してきました。私は音楽の楽しさを基盤にして、いろいろな生き方に気付かせてもらったように思っています。

音楽は美術、書道、文学など他の表現芸術と同じく、人類の生活のなかから生まれ、社会の発展とともに、人とのかかわりから多様な表現を生み出してきました。特に音楽は、「音」という具体的な形として手で

触れたりして確認できる素材を媒介としないため、個人や人びとの生きている環境に大きく左右されながら、非常に感覚的な心情の相互交流によって、相互に受容し合い、また非言語的である故に、まったく自由な心の遊びを楽しむ文化として、発展してきたと思います。しかし、それだけに、個々の自分の楽しみにとどまらず、より多くの人びととの間でも分かち合いたいと願う表現の形も育まれてきました。また、さまざまに求める表現は変容してきています。この変容のどのような過程でも、人びとは心の安定を求める対象として音楽を求め、選び、生きる楽しみとして、音楽によって生活に潤いを抱いていこうとしています。音楽は人とのかかわりをもってこそ発達し続けているといえるでしょう。

音楽には多様な表現があります。時代的に、地域的に、地理的に、職業的に、年齢的に、個人的にと、さまざまに語りかけてきます。なかでも人びとに長く共有された音楽には、どの表現がすぐれているという比較ができないほどです。人びとが真摯に生きるなかから生まれ出た表現には、水をたたえた大河の流れのような、豊かな人間の心情が語られています。時を越え、表現分野の壁を越えて、人びとの間に生きて残る音楽には、人の一生に感じる喜怒哀楽をはじめ、心の壁が音によって描かれ、私たちの鼓膜でなく、心に語りかけてくるものがあります。心の共振を呼び起こします。まるで語るように、ある時は心の深淵まで到達し、ある時は心の窓を軽やかにノックし、ある時は心を掴み揺さぶるなど、心を動かしおどろかし、生きていることを告げていきます。音楽は私たちの一生が、心身ともにあることを教えてくれるものです。

私たちはこの一生の間に、どれくらいのそうした音楽と出くわすことでしょうか。どの音楽にも、果てしない人類の音に託した言葉とならない感情の足跡がつつられているのです。そのように思って、音楽を鑑賞し、演奏することによって、生涯の友との出会いを得た幸せなぬくもりと安心感に包まれた生きる楽しみを、しみじみと感ずることが出来ます。

現代は孤立化していく社会の様相を呈し、人間関係が大変希薄化しています。心を自分以外のところに委ねるといふゆとりがないように感じます。特に未来を担う若者において顕著です。音楽は孤独な心にも、生きる勇気や人を受容する効果を持っています。しかし、音楽がより豊かに人びとの生活に意義ある身近な芸術文化として輝き続けるには、多くの人びととの間でもともに生き続けることだと考えます。言い換えるならば、音楽は人の生涯に亘り伴侶として存在できる自在な形をもったものと言えるでしょう。個々人のなかに封じ込められた崇高なる芸術音楽のみでなく、誰でも実現できる人びとを結び芸術文化としての楽しさも求めていきたいと思えます。個々の生活感情を基点とし生活感情を豊かにしながらも、人びとの間で誰もが共有できる音楽を求めて生きるところに、楽しさが生まれます。音をとまなう豊かな感情表現には、たとえそれが怒りの感情であっても、すでに人としての許しが込められているものです。主観と客観のなかを心めぐらす豊かな心的活動があるのです。全身全霊での遊びです。音を紡ぎ演じながら、自己の音楽をつくり出すことは、隣の見知らぬ人の音楽を理解することにもなります。

私の面接授業では音楽を通して、多くの世代の方々とともに、さまざまな心の旅を体験できたらと思えます。さまざまな音楽体験を持たれる幅広い年齢層の方々が集う時間ならではの、音楽の楽しみを見出し創造的な授業になるようにしたいと思います。とはいえ、私は放送大学千葉学習センターでの授業は初めてです。受講者の方々から私も刺激をいただき、音楽のよさを新たに発掘していきたいと思っています。また、面接授業によって皆様方の学習生活が、より心豊かに進められようお手伝いができますようにと思っています。皆様方とお会いできるのを楽しみにいたしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

客員教授 前田早苗(平成21年4月1日着任) 千葉大学普遍教育センター教授  
専攻：教育評価学



### 変わる大学と学びのかたち

今年度から本センターの客員教授に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。本務は、千葉大学普遍教育センターです。専門分野は高等教育で、なかでも大学評価について研究しています。

私は一昨年まで財団法人大学基準協会という大学団体で大学評価研究部長として、大学を評価する仕事に携わってきました。

「大学評価」というと、多くの方がまず「大学ランキング」を思い浮かべるのではないのでしょうか。最も身近なランキングとして予備校が作成する偏差値があります。国家試験の合格率や財務状況の比較、学生や企業への満足度調査結果などのランキング記事もよく週刊誌に掲載されるので、買わないまでも本屋さんでついページをパラパラと探してみたくなるものです。

こうした数字によるランキングは全く無駄とは思いません。しかし、今、大学に求められている評価はこうした数字によるランキングとは違うものです。

大学はどうして評価される必要があるのでしょうか。

日本の大学制度は、1949年に一新されました。カリキュラムのあり方、専門分野の名称、教員数や施設・設備などの細部にわたって厳格に定められた新しい「大学設置基準」によって認可された新制大学は、現在700を優に超えます。戦前にはわずか50校前後だったことからすると15倍にもなります。その大学を卒業した学生は日本の高度経済成長を支える労働力となり、日本の発展に多大な貢献をしてきました。

その反面、どの大学も同じような教育をしていて個性や特色がない、どういう人材を養成しようとしているのかわからない、という声も大学の内外からでてきました。そこで、大学がもっと自由で個性的に発展するために、法的な規制(大学設置基準)を緩和しよう、同時に大学が自ら掲げた目的に照らして、大学自身を評価し、改善すべきは自ら進んで改善しようというのが、大学評価の始まりです。大学が自律的に発展しようという高邁な精神に基づいていたと言ってもよいでしょう。

ただ、自分で自分を評価しても甘くなるのではないかと、主観的すぎて公正な評価とは言えないのではないかとということから、外部のしかるべき機関が評価すべきであるということへと流れは変わっていきます。

この流れを加速するような社会的な変化が起きてきました。ひとつが少子化の問題です。大学によっては思うように学生を集められずに質の低下を来すところも出てきたのです。もうひとつは、小泉首相時代に象徴される大幅な規制緩和です。大学に対する規制がさらに緩くなり、これまでには考えられなかった多様な大学も出現してきました。既成概念では大学の良し悪しが測りにくくなったのです。そこで、大学の「質」をチェックするという評価の役割が強調されるようになってきました。

これが大学評価の時代といわれるようになった理由です。

四半世紀にわたる動きを駆け足でご説明しましたが、最後にもう一つ重要なことについて是非触れておきたいと思います。

「象牙の塔」という言葉に象徴された大学は、大きな変革を遂げつつあります。大学は社会経済がどのように変化しようとも真理を探究する孤高を保った研究教育機関でなくてはならない、そんな時代はとっくに終わりました。大学は、社会と深く連携し、社会に貢献していかなければならない存在なのです。

教育に関して言えば、学生に教育を授けるという姿勢から、学生が「主体的に学ぶ場」へと変わりました。それは21世紀が知識基盤型社会といわれていることとも深く関係しています。戦後の目覚ましい発展により、日本は豊かになりましたが、少子高齢化が深刻な状況にあること、めばしい資源を持っていないことなど、今後、今の生活水準を維持し、発展していく見通しは決して明るいものとは言えません。一人ひとりが知的水準をあげ、自分なりの職業観、人生観を確かなものとしていくための「学び」が特に重要となっているのです。主体的に学ぶということは、喜びも大きいですが、誰かに課されるのではなく、自分で調べ、考えるという努力と意志が必要です。

放送大学の学習形態は、「主体的な学び」に最もふさわしい大学のひとつだと思います。メニューはたくさん用意されています。幅広く教養を身につける、あるテーマを深く掘り下げる、どちらも大切な学び方です。自分が何についてどのように学びたいのかをみつけて、どうぞ充実して総り大きい大学生活を過ごしてください。

客員教授 加藤隆（平成21年5月1日着任） 千葉大学文学部教授  
専攻：宗教学 担当面接授業：『新約聖書』から何を学ぶか



### 「学ぶこと」について

私は今年度から、客員教授として、皆さんと一緒に勉強していくことになりました。

三つのことを、記したいと思います。

1) この4月の初めに私は、千葉学習センターで「入学者の集い」に参加しました。そこで感じたことで、宮崎清所長の挨拶にもあったことです。それは、勉強したいという強い意欲が放送大学の皆さんにあることが、ひしひしと感じられたということです。

大学は、勉強をするところです。学ぶことは、新しい世界に自分自身を導くことで、それが 他にもいろいろと意義があるでしょうけれど まずは自分にとって喜びになっていなくてはならないと思います。その喜びの予感のようなものを皆さんが強く感じている、それが私にも伝わってくる、そのように思われました。大学が何といても学びの場であることが、放送大学では、かなり実現されているのかもしれない、と思いました。このように素晴らしいところに私も参加することになりました。

微力とはいえ、できる限り有効な働きができればと願っています。

2) 私も実は、30歳代半ばまで学生でした。日本ではまず、文学を勉強しました。文学が嫌になったのではありませんが、神学を勉強したいと思うようになって、20歳代半ば頃に、フランスで、学部の1年生の段階から神学を学びました。結局、10年間以上、フランスで学生として過ごしました。ずっと学生でいたかっただけですが、博士論文が終わってしまうと、生活のためにやはり就職しなくてはならなくなって、日本に帰ってきて、就職しました。

しかし、教える立場になっても、勉強しなければならないことが沢山あります。勉強の現場はいたって地味なもので、いくらか努力しても何も進展しないような気がして、意気阻喪してしまうようなことがあります。それでも、工夫を重ねながら続けていくと、見違えるような相違が生じてきます。「分からなかったことが、分かるようになってくる」のです。「学問が成就する」などということはありませんが、それなりの成果を重ねていくことには、それが少しずつであっても、大きな意義があります。

3) では学問とは何か、ということになります。ここでは簡単にしか言えませんが、私なりの説明を試みます。

私たちは、この世界のなかで生きています。「自分」があって、「現実」があります。「分かった」というのが、学問の根本です。ところが、自分の周りの現実には、一応のところ理解できているところもありますが、「分かっていない」ところがほとんどです。「私の外の世界」のことで、分からないことが沢山あります。それから、「私自身」というか「私の内部」についても、ちょっと注意してみると、分からないところだらけです。「私」の内外のこの「分からない部分」に、「私」の側からなんとか理解の光をあてようというのが、学問の根本です。先人の「理解」や「方法」を学んで参考にすることも必要ですが、それだけでは自分の理解にはなりません。最終的には、自分の理解を作らねばなりません。

しかも、私の場合、さらにもう一歩があります。

「近代」と呼ばれる時代になってから、「自然科学」に代表される「科学」的方法が整備されてきて、私たちの理解の領域はかなり広がり深まりました。しかし、「科学」的方法ではうまく掴みきれない領域がまだまだ広がっています。従来の言葉を用いるなら、広い意味での「文化」の領域です。さらに、どのように言うか難しいところですが 「神秘」の領域があります。特にこの「神秘」の領域は、近代においてはおざなりにされてしまっている傾向が強いと思われます。しかし、「神秘」の現実は、存在しますし、重要です。こうした私の見方は、私がまず文学をやって、それから神学をやったことと、無関係ではありません。

「神秘」というのは、「分からない」という意味です。それで誤解されてしまうことが多くて困るのですが、「神秘」の領域についても、ただ呆然としたり、思いつきを並べたりするのではなくて、有効なアプローチを進める手段はいろいろとあります。特にこのあたりのことを、皆さんと一緒に考えていければと思っています。

## 客員教員からのメッセージ

客員教授 山本忠(平成21年5月1日着任) 千葉大学名誉教授  
専攻：化学 担当面接授業：有機化学の楽しさ



### 知ること・学ぶことに貪欲になって

今年から放送大学千葉学習センターで面接授業を担当することになりました、山本忠(まこと)です。

私が科学に興味を持ち始めたのは、小学5・6年生のころ北里柴三郎や高峰謙吉の伝記を読んでから、と記憶しています。このころは漠然と大きくなったら科学者になりたいという夢を抱いていました。

化学の知識が増えるにしたがい、もっと深く化学の研究をしてみたいと思うようになり、東京教育大学大学院へ進学し理学博士の学位を取得しました。学位を取得してもこの当時は大学への就職が思うに任せないこともあって、何の迷いもなく2年間アメリカ・ピッツバーグ大学ダニシェフスキー教授の研究室に留学しました。ここで教授の化学に対する考え方や姿

勢を目の当たりにすることができ、化学に対する新しい目が開かれました。博士研究員が世界各国から集っていたことも大きな刺激でした。帰国後千葉大学では金属の関与する新しい有機合成法の開発を最後まで続けました。

化学も、他の学問と同様に、基礎的な知識と用語を理解することがどうしても必要です。これをクリヤーすると周りの化学物質に対する関心が高まり、いろいろなところで化学物質が役立っていることがわかってきます。ここまで来ると、化学を学ぶ楽しさが実感できるようになります。また、例えば、非常に簡単な構造の化学物質が空気中を流れてゆくことで、花の開花や果実の熟成をコントロールしていることや、同じ植物間で情報を交換している(=植物同士の会話)のも化学物質であることなどを知ると、化学の重要性を理解することができます。地球温暖化の原因はCO<sub>2</sub>やメタンなどの化学物質です。印象の良くない環境ホルモンの問題も化学物質のなせる業ですが、それらも含めて我々が生きてゆく上で、化学物質との関わりを抜きにしては、成り立たなくなってきていることも理解できるでしょう。

放送大学で学ぶ皆さんは年齢も経歴もさまざまですが、しっかりと学習意欲を持っている方々であると聞いています。皆さんに望むことは、知ること・学ぶことには貪欲になって欲しいということです。面接授業や学習相談を通じて、皆さんと楽しく学ぶことができることを、今から楽しみにしています。皆さんの知的好奇心に期待しています。一緒に頑張りましょう。

客員准教授 植田憲(平成21年4月1日着任) 千葉大学工学部准教授  
専攻：デザイン科学 担当面接授業：デザインの基礎、日本のデザイン文化を考える



### 「学びたい」強い思いをもたれた方々とともに

私は、この度、放送大学千葉学習センターの客員准教授を拝命いたしました植田憲(うえだ あきら)と申します。よろしくお願ひいたします。

私と放送大学との出会いは、それほど古いものではありません。所長の宮崎清先生からご紹介いただいたことがきっかけです。それまでは、恥ずかしながら、放送大学での授業はすべてが放送を通じて実施されるのだと思っていました。教室で行う授業を面接授業と称するというのも、最近になって知りました。しかし、昨年度と今年度担当させていただいた2度の面接授業で、みなさんが、実に熱心に課題に取り組んでいる様子に触れることができました。放送大学とは、「学びたい」という強い思いをお持ちの方々が学ぶ場なのだつくづく感心いたしました。もしかしたら、千葉大学の学生さんよりも熱心といっても言い過ぎではないかもしれませんが。

そうしたみなさまの思いに応えていけるように、私自身も、いろいろと勉強させていただきながら努力していきたいと思ひます。

放送大学千葉学習センターと私の勤める千葉大学とは、電車で数駅ととても近い位置関係にあります。千葉大学では、放送大学との単位互換科目として開放されている科目がいくつもあります。また、放送大学では、千葉大学の多くの教員が放送大学の講師を担当していますし、事務の方からも出向している人が多いとのこと伺いました。そういう意味では、距離的に近いだけでなく、実質的にもとても近い関係にあると言えます。今年度は、みなさまのお手伝いをさせていただきつつ、両校の関係を深める役割を担うことができれば嬉しく思ひます。

なにぶん、私自身、放送大学の客員教員となるのははじめての経験ですので、すべてが手探りとなりますが、精一杯取り組んでまいり所存です。何卒よろしくお願ひいたします。

## 日中書画展示会・実演会が行われました。



4月16日(木)、正午から夕刻にかけて、千葉学習センター2階の「学習・集い室」を主会場として、中国から来日された書画家たちの作品展を開催いたしました。このたび来日された一行は、いずれも中国の第一線でご活躍されている芸術家たちで、2階の廊下までもはみ出すほどに多数の作品をお持ちくださいました。宮崎所長の知己が一行のリーダーを務めていたこともあって実現した作品展で、会場は筆墨も鮮やかな作品で埋めつくされました。

一行は、会場で個々の作品紹介をした後、用意された中国紙に、思い思いの書体を駆使して、書画の実演もしていただきました。「書画に上手、下手はない。書き手の心が表現されることが最も大切」とも話され、実演には千葉学習センターの学生ならびに教職員も参加し、楽しい交流が繰り広げられました。

わずか半日ではありましたが、展示会・実演会に臨まれた方々全員が、互いの書画を交換したり、書画をかざして写真におさまったりなどしながら、一衣帯水の距離にある日中の文化交流をよりいっそう盛んにすることを誓いあいました。

一行は「今度は中国で」の言葉を残されて、東京に向かいました。



## 本年度月例公開講座のお知らせ

平成21年度より、千葉学習センター主催の広く市民に開かれた公開講座(聴講無料)を月例で開催いたします。

すでに終了しているものも含め、開催予定をお知らせします。

多くの皆様のご出席をお待ちしています。

- |          |               |             |            |
|----------|---------------|-------------|------------|
| ・宮崎所長    | 藁からのメッセージ     | 4月10日(金)午後  | 於・千葉県生涯大学校 |
| ・加藤客員教授  | 愛の諸相          | 5月31日(日)午後  | 於・千葉学習センター |
| ・宮野客員教授  | 心の窓を拓く <うた>   | 6月28日(日)午後  | 於・千葉学習センター |
| ・宮崎所長    | 伝統的工芸の魅力      | 7月18日(土)午前  | 於・船橋市      |
| ・宮崎所長    | 地域の華に基づいて     | 7月23日(木)午後  | 於・富里市      |
| ・前田客員教授  | 大学で学ぶ教養とは     | 8月 8日(土)午後  | 於・千葉学習センター |
| ・植田客員准教授 | 地域アイデンティティの創生 | 9月12日(土)午後  | 於・千葉学習センター |
| ・山本客員教授  | 蘭を育て楽しむ       | 10月17日(土)午後 | 於・千葉学習センター |

放送大学千葉学習センターは、年代・職業・地域を問わずさまざまな方々が集い、学生と学生、学生と教職員とが学習やサークル活動などを通じて日ごろから触れ合える場です。



放送大学 千葉学習センター

〒261-8586 千葉市美浜区若葉2丁目11番地

TEL. 043(298)4367 FAX. 043(298)4386

HOME PAGE: <http://u-air.net/chiba/>